



ジェッタ・ダルジの仕立ての技術

ジェッタは、ネパール語で「長男」を意味する。彼の本名はカンマール・ダルジなのだが、村人はみな彼のことをジェッタと呼ぶ。

ダルジはダメイともいい、服の仕立てと冠婚葬祭のさいに音楽を演奏するカーストである。そういうと聞こえはよいが、カーストの階層でいうと最下層の、いわゆる不浄カーストに属する。だから、彼は私の住んでいた家で服を新調したり、破れた所を繕うときには、家の軒下にミシンを置いて仕事をする。不浄とみなされる彼は、上位カーストの家の中には入れてもらえないのである。

●青い布で縁取られたチョッキ

私はジェッタの仕事にとても驚かされたことがある。一〇年前、私はお世話になった羊飼いかからアバラという羊毛のチョッキをいただいた。



ジェッタの家族(1998年)

この村では、羊毛を織機で織り、洗って縮めてフェルトに加工する。フェルトの布までは羊飼いの家で作るが、チョッキに加工するにはさらに裁断縫合する必要がある。それで家の人は、ジェッタを呼んだのである。フェルトとはいえ、粗くて硬いネパール原産種の羊毛を使うので、布の厚さは一センチメートル近くある。さすがのジェッタでも今回ばかりはミシンを使えまい。どう考えても、この厚さではミシンの布を押さえるストッパーを通らない。

そんな私の考えを見透かしたかのように、ジェッタはミシンのストッパーを上げて縫い出した。マニユアル・ミシンならではの技である。だが、布を二枚重ねて縫うのは無理だ。そこで彼は羊毛の布の間に、青い布を縫いこみ、分厚い羊毛の布をつなげた。完成したチョッキには、布のつなぎ目すべてに青い布があててある。それはあたかも縁取りがほどこされたように仕上がっている。青い布はたんなる飾りではなく、実用的な機能をもっていたのである。

●世界に誇れ、職人の技

もともとそんな伝統的な知識も、近代的社会の動きに飲み込まれそ

うになっている。「出稼ぎに行くからパスポート用の写真をとってくれ」。ある日、ジェッタはそう言っ
て私のところにやってきた。せっか
くよい仕立ての技術をもっ
ていても、外国に行けばど
うせ単なる非熟練労働者と
みなされてしまうのだろう。
私はやるせなく思ったもの
である。

それから一〇年がたち、

結局、ジェッタは外国に行
かなかつた。お母さんがなくなり、

彼は八人兄弟がひしめく母屋に一家
の主として移ってきた。かわりに彼
の弟がカタールへ出稼ぎに行き、つ
いこの間村に戻ってきた。弟はT
シャツ、Gパン、サンングラスのいで
たちで颯爽と現われ、おみやげには
最新のステレオを買ってきた。

この一〇年で村では海外への出稼
ぎが普及した。かつて不浄カースト
と蔑まれた彼らでも、他カーストと
同様に経済的な蓄積が可能になった。
私はそれが今後彼らの社会的な地位
の向上につながると、考えている。
同時に彼らが長年培ってきた技術や
知識に誇りをもち、後世に伝えて欲
しいとも願っている。



羊毛のチョッキを仕立てるジェッタ。
縁取りの青い布を縫い付けている



わたなべ かずゆき
渡辺 和之
立命館大学非常勤講師
民博 共同研究員

専門は環境人類学。ネパールの
羊飼いの資源利用を研究してい
る。最近では、彼らの村の社会
変容を調査している。著書に『羊
飼いの民族誌』(明石書店、二〇
〇九年)。